



Kenji Murakami

村上建治郎

株式会社 Spectee (スペクティ)
代表取締役 CEO

SNS×AIの独自発想で 災害リスクの「可視化」と さらに「予測」まで提案

「阪神・淡路大震災での被災や、東日本大震災でのボランティア経験から、防災に正面から向き合いたい思いが強まり、出した結論が『防災で起業する』でした」（村上建治郎氏）。その考えは、社名の Spectee につながるラテン語を語源とする「スペクト (spect)」の「見る」の意に結び付き、AI を防災に生かすサービスを生み出した。

(文・写真：吉井 勇・本誌編集部)

被災者と災害ボランティアの立場を経験

—— 阪神・淡路大震災で被災されたと聞きました。

村上 大学生の時、住んでいた神戸市灘区のアパートがつぶれました。激しい揺れで目が覚めたのですが、全く動けません。アパートから抜け出ると、向かいの2階建て戸建ての1階が押しつぶされていました。その家のお父さんに冷蔵庫などが覆いかぶさっていて、

近くの人たちと素手でガレキを取り除き、強引に引っ張り出しました。多分、腰骨を骨折していたと思います。

—— 救急車は来たのですか。

村上 来ませんでした。大震災ですから動けない状況だったのでしょう。

—— 不安が強かったと思いますが。

村上 情報を得るには、この目で見えるか、誰かに聞くしかなかったのが、何がどうなっているのか、何もわからず不安でした。

—— 公衆電話に長蛇の列という映像が放送されましたが、避難所での情報手段はどうしたのですか。

村上 当時、避難所にはテレビはなく、公衆電話が外部との連絡手段でした。印象に残っているのが、避難所に新聞が配達されていたことです。

—— 避難所ではどうしていたのですか。

村上 両親に無事を伝えた後、避難所で生活をしながらボランティアとして動きました。東京の実家に戻ることでもできたのですが、復旧支援が大事だと考えました。

—— 米国留学後、IT分野で働いていたそうですが、東日本大震災では被災地へボランティアとして駆け付けています。

村上 神戸での体験があったので、仲間3人と車で向かいました。津波の被害を見て、阪神・淡路と様相が全然違うことに愕然としました。宮城県東松島で、ガレキの撤去や物資の調達などの支援に取り組んだりしていました。

—— 被災地に入られて気付いたことは。

村上 東京で見ていたマスメディアが伝える情報と、被災した現地とのギャップです。マスメディアが伝える情報には限界がある。では、被災地の「リアル」を、どうすれば伝えられるのか、考えました。ちょうど広がり始めたツイッターが、現地で何が起きているのか、何が必要なかをリアルタイムに伝えている印象があったので、「このSNSを活用できないか」という考えがもたげてきたのです。

SNSの可能性に気付く

—— SNSの登場は、情報発信を大きく変えました。

村上 誰でも発信できる SNS の可能性は無限大です。震災当時、現地の情報がより詳細に、リアルタイムに共有されていたのはツイッターやフェイスブックでした。2009年ごろから日本で普及し始めたツイッター利用者はまだそれほど多くなかったですが、防災に生かせるという確信を持ちました。

—— ツイッターなどの SNS に上げられた情報を生かすために、村上さんたちの取り組みを教えてください。

村上 大量にアップされるテキストメッセージや写真、動画の情報を内容によって振り分けることです。そのために、話題になりつつあった AI の活用を考えました。現在ならクラウドのサービスを通して比較的簡単に実装できる AI 技術ですが、当時は自分たちで開発するしかありませんでした。調べる中で、カリフォルニア大学バークレー校がオープンソースで機械学習の仕組みを提供していたのを見つけ、技術メンバーとカスタマイズしました。このおかげで、膨大な情報を精度高く処理できるようになったのです。発信場所の特定や信ぴょう性の判断までも自動で処理できるようにしました。それが 2013 年ごろでした。

—— 自分たちで技術開発したことに驚きます。

村上 AI を活用した「Spectee」のテスト版を 2014 年にリリースした直後、首都高・渋谷線で大規模な火災が発生しました。この時、SNS に次々とアップされた情報を Spectee がリアルタイムに処理をして速報したのですが、防災・危機管理のソリューションとして使える、という先が見えた瞬間でした。

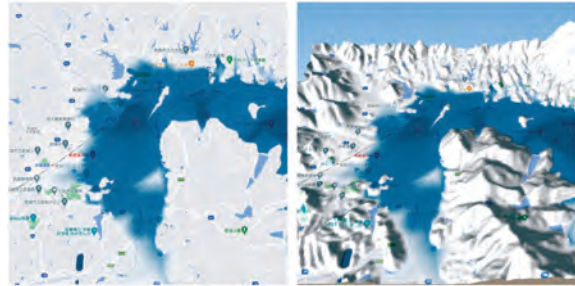
「Spectee は報道を変える」という確信

—— 本誌編集部が Spectee を初めて取材したのは報道機関のサービスでした。

村上 Spectee のスタートは、プロ野球などのスポーツ観戦でのスタジアム応援のネット共感サービスでした。スタンド観戦の人たちがアップしたコメン

■ SNS 投稿画像を基に AI で解析・作成

「佐賀県武雄市の六角川周辺の浸水推定図 (2021 年 8 月 14 日 10 時頃)」



Maps Data: Google © 2021 / Flood Images: Spectee Inc. / Creation Date: August 14, 2021

- SNS に 8 月 14 日午前 10 時頃に投稿された六角川氾濫の 1 枚の画像を基に、浸水の範囲および深さを解析して 2D/3D のマップ上に再現する技術
- なお、図は本技術に基づく推定値。本技術の開発と並行して精度検証に取り組み中

トや興奮を、球場に行けない人がスマホでメッセージを読みながら楽しむというアイデアで、全国の祭りでも同様の展開をしました。手応えはあったのですが、イベントが終わると続けることができないというビジネスの継続性に問題がありました。収入源は広告だったので、スポンサーの安定的な確保も難しかったのです。ちょうどこのころ、ある展示会のブースに新聞記者が来て「使っているよ」というのです。「取材ネタ」探しに重宝していることを聞き、Spectee を報道用のサービスにシフトさせました。

—— この当時、Spectee 社は SNS と AI を使った SNS のリアルタイム解析という技術で、仏通信会社 Orange 主催のスタートアップ支援プログラム Orange Fab や、スタートアップを育成する Open Network Lab など、海外も含めて積極的に参加されています。

村上 報道機関が使うサービスならスマホではなく、パソコン画面でさまざまな情報を一括に把握できるサービス開発に取り組みました。そして、2015 年の Open Network Lab に参加した時に、「Spectee は報道を変える」というプレゼンテーションをしました。報道機関が使うサービスならスマホではなく、パソコン画面でさまざまな情報を一望できるサービス開発に取り組みました。その後、開発したサービ

スを携えて全国の報道機関を行脚しました。

—— 全国の放送局にも意見を聞き回ったのですか。

村上 そうです。そのころ、LINE、フェイスブック、ツイッターなどの利用者は70%を超え、10代から20代の利用者は98%以上と急激に広がっていました。当然、アップされる情報は増えていきます。そのために真偽のリアルタイムな判断・処理が追いつかなくなることもありました。報道機関からは「真偽の判断が完璧でなくても早く知りたい。自分たちで判断するから」と言われました。一方、自治体の防災担当は「少し時間がかかっても信頼度のある情報を提供してほしい」と。そこで気付いたことは、ユーザーによって違いがあることでした。AIによる自動処理に加え、人による最終判断も組み込むことにしました。そのため、社内に判断の専門チームを用意し、そのスキルを培う研修も含めた体制づくりに動きました。

—— 発想と実行力に驚きます。

村上 2016年4月に発生した熊本地震では、園内から逃げたライオンのデマ画像がツイッターで発信される問題も出ました。Specteeは報道向けに、無数に投稿される情報をAIでいち早く解析してピックアップし、重要な投稿を前面に表示する作業をリアルタイムで実行し続けました。そうしていくと「あの映像の情報源はどこか」との問い合わせが殺到したのです。この手応えで「報道利用は間違いない」と自信を強めたのですが、経営面は火の車でした。

—— 技術は認められながらも、資金面での苦労は続いていたのですか。

村上 そうした厳しい中、フジテレビさんが出資を素早く決断してくれました。正直に言えば、「来月、資金がなければアウト」という薄氷の経営状態でした。

多様な情報を収集・解析し地図と連動

—— 米AP通信社や英ロイター通信との事業提携や、日本気象協会との共同開発、ソニーマーケティングとの業務提携など、2019年は大型案件を次々

と発表しています。そうした動きと合わせて新しい「Spectee Pro」を発表されるなど、ビジネス意欲がほとばしっています。

村上 Spectee ProはSNSの情報だけでなく、河川や道路のカメラ映像、気象情報、人工衛星の画像データ、自動車プローブデータなどを収集・解析し、地図と連動して表示するもので、被害状況をはじめ、リスク予測などがひと目でわかる表示機能を搭載しています。

—— 利用ユーザーが広がる新機能です。

村上 報道機関から鉄道、電力、通信、高速道路といった社会のインフラを担う企業や、製造業などのサプライチェーンのリスク管理、物流企業の遅延リスク管理など、BCPやリスク管理の最前線ソリューションとして利用企業が広がっています。

—— 最近、Webセミナーをさまざまなテーマで開催されています。

村上 Spectee Proの機能を理解してもらいたいからです。また、新たな仕掛けを用意しました。SNS投稿の水害の画像から降水量と地形のデータを組み合わせ、リアルタイムに「浸水推定図」を表示したり、衛星画像を使って人やカメラのない山間部などを瞬時に、俯瞰的に把握したりできる機能です。

—— 災害状況をリアルタイムに可視化するだけでなく、被害がどう広がるかを「予測」する領域へ進化させているのに驚きました。自治体の担当者などから、AIによる外国人向けの翻訳サービスを考えてほしいという要望があります。

村上 日本に住む外国人も多くいますし、インバウンドの観光客にも素早く伝えるために、AIが得意とする言語翻訳を考えていきます。

—— 障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法が成立しましたが、情報弱者である視覚や聴覚に障害のある人たちとの災害対応の支援につながる新たなSpecteeの機能を期待しています。

村上 災害列島である日本のスタートアップが開発した革新的なAIによる防災ソリューションとして世界で活用されるサービスを目指します。